

ワウ  
チエツ  
デ

マ  
ク  
ル  
な  
魔  
女  
を  
調  
教  
し  
て  
み  
た

立ち読み版

小説 著 井村正  
挿絵 ぎうにう

一章	導きご奉仕する魔女
二章	責める魔女
三章	縛られる魔女
四章	捧げる魔女
五章	欲落する魔女
六章	添い遂げる魔女

## 登場人物紹介

Characters



とりがいし あ

### 鳥飼紫亜

学園の高嶺の花として生徒達の憧れの的であり、生徒会副会長まで務めるパーフェクトクールビューティー。ある任務で涼太に接触してくる。

かがみはらりょう た

### 鏡原涼太

ちょっとSツ気があるが、それを実行に移す度胸や機会が無く、エロ妄想に耽る日々を送っている少年。

り、と香ってくるフローラル系の芳香にウットリとした表情を浮かべた少年は、凶々しいリクエストをする。

「……良く聞きなさい、鏡原涼太君。これは夢ではないわ。れっきとした現実よ」

いやらしいおねだりをされても表情を変えないクールな美少女は、締まりのないスケベ面を浮かべた少年の顔を見下ろしながら、歯切れの良い口調で告げる。

「うーん、夢の中の人に、『これは夢じゃない』とか言われて信じろっていうのが無理だよ。それよりも、もっと気持ちいいことしようよ、どうせ、エッチな夢なんだからさ。ぐお！……痛ててててッ！」

紫亜の美豊乳に頬ずりしようとした涼太の髪が驚掴みにされ、捻りを加えながらギチギチと引つ張られる。

「痛いでしょ？ 鏡原君、これが現実だということを理解したかしら？」

静かに語りかけてくる美少女の指には、誇張抜きで頭皮ごとむしり取られるのではないかと恐怖してしまうほどの容赦ない力が込められていた。

「つああああ……わっ、わかったわかったあ！ 判りましたからあ！ 髪ッ！ ゴッソリ抜けるッ！ マジで禿げるから止めてくだしゃいいい！」

「判ればいいわ……。ここからが重要だから、しつかり聞くのよ？」  
髪を掴んでいた手を離れた紫亜は、さらに身を屈め、吐息がかかるほどの至近距離で涼

太の目を見つめる。

「う……うん。聞く……聞きます」

すっかり主導権を握られて従順になった涼太は、間近に迫った美貌に見とれながら何度も頷いた。

「それでは説明するわよ。鏡原涼太君、あなたは本日ただ今をもって、きんじゅふういんきよく禁呪封印局の経過観察対象から、嚴重管理対象に昇格したわ」

「ほえ？ きんじゅ、何だつて？ 観察から管理つて？ オレが!？」

言葉の意味を半分も理解していない少年は、惚けた声を上げる。

「禁呪封印局、よ。鏡原君、さつき、魔法を發動させたでしょう？ 魔力波動から判断すると邪眼系……鏡原君のむつつりスケベな性格から察するに、着衣透視、かしら？」

淡々とした口調で凶星を指された涼太の顔が、ギクツ！ と強ばる。

「あは、あハハハハッ、あー、やっぱりこれって夢じゃないの？ この世に魔法なんて有るわけが……あぎぎぎッ！」

今度は頬肉を摘んで思いつきり引つ張られた。

「やっぱり痛いでしょ？ そろそろ現実を認識してもらわないと話が進まないわ、鏡原君……どう、理解してくれたかしら？」

口調は静かだが、頬をつねる指には、冗談では済まされない力が込められている。

「ふあいい……わふありまひたあぁ……ほっぺ……千切れりゅうう……」

思いつきり変顔にされた少年は、涙目になって現実を受け入れる。

「はああ、痛かった……ホントのホントに、これって夢じゃないんだね？ さつきオレが使ったのって、超能力だと思ってたけどマジで魔法だったの!？」

見えないロープで身体が簀巻きにされているため、痛む頬を摩さすることもできない涼太は、学園ナンバーワンの美少女にまだ半信半疑の口調で問いかける。

「ええ。あなたが使ったのは、疑問の余地なく魔法の力よ。とうとう目覚めてしまったのね、禁呪認定されている性魔道師の遺伝因子、『クピドの矢』が……」

「くびどのや？ 何、それ？」

魔法とか、何とか封印局とか、謎ワード、『クピドの矢』とか、フィクションでしか耳にしたことのない単語を立て続けに聞かされた少年の頭は、状況を整理しきれずにパンク寸前だ。

「クピドの矢というのは、あなたのここに宿る、極めて強力で危険な魔道因子のことよ」  
制服の股間に伸びてきた少女の手が、ストラックスの下で半分萎えかけた状態の『男のシンボル』をさわつ、と撫で上げる。

「ウヒッ！ えっ、えええッ!？」

制服越しとはいえ、学園一の美少女に股間を触られた少年は、素っ頓狂な声を上げてし

まう。

（鳥飼さんが……みんなの憧れの超絶スーパーフェクト女子が、オレの……ちつ、チンポ触ったああああ！ 夢じゃない、この感触、夢じゃないんだッ！）

異常な状況下であるにもかかわらず、歓喜と興奮に包まれた涼太のペニスには、海綿体に熱い血潮をみなぎらせて、グングンと体積を増してゆく。

（ヤバイ……勃起しちゃったあ……鳥飼さん、無表情なのが逆に怖くて恥ずかしいよ）

クラスメイトの美少女に勃起してしまったことを悟られることに、焦りと羞恥を覚えて身を強ばらせる涼太であったが、硬度と体積を増してゆく股間を撫でさすっている紫亜の表情に変化はない。

「鏡原君は、自然にしているのよ。今は私に身を任せて、このまま話の続きを聞きなさい」

「うひ……はッ……はい……」

制服の股間に浮き出てきた肉柱の輪郭を確かめるかのように指を滑らせながら、クールな美少女は告げる。

「まず最初に注意しておくわ。一般人への魔法使用は重罪なのよ。特に、性魔法の行使は社会秩序を著しく乱すということで、禁呪封印局による取り締まりの対象となっているの。二度と、一般人に魔法は使わないこと！ いいわね？」

「使うとか言われても、オレ、魔法を使おうと思ったわけじゃなくって……そつ、その……ちよつとエッチな妄想したら、女子の服が透けて見えて……透視能力だと思って調子に乗っちゃって……ごつ、ゴメンツ！」

しどろもどろの口調で言い訳する涼太。

（とりあえず謝っておかないと、鳥飼さんって無表情なまま、結構きついこと仕掛けてくる人みたいだからなあ……）

「物的被害は出ていないから、謝る必要はないわ。鏡原君の股間に宿った『クピドの矢』の魔力が、淫らな妄想に導かれて透視魔法として発動したのだから、それは素晴らしい才能の発現なのよ」

「妄想も、才能って言うのかなあ？ うあ、あうううッ！」

制服の布地越しに浮き出た亀頭冠の段差を優しく撫でくすぐられるゾクゾクするような快感に呻きながら苦笑を浮かべてしまう涼太。

「魔法使いを志す人が、数十年の間、苛烈な修行を積んでもたどり着かないレベルに、鏡原君は日々の妄想と、エッチなゲームをやりながらの自慰行為だけで到達してしまったのだから……才能と言うより、天才と表現すべきかも知れないわね」

静かに告げた少女は、完全勃起状態の膨らみを浮き出させた少年の股間にチラリ、と視線を向けると、再び涼太の顔を見つめてくる。



「ちよ、ちよつと待つてよ、妄想はいいとして、エロゲやりながらの自慰行為とか……まるで見てきたようなこと言うんだね？」

プライベートな行為を見透かしているかのような美少女クラスメイトの指摘に、顔を引きつらせる涼太。

（なんで鳥飼さんがオレのエロゲ趣味を知ってるんだ？ クラスの男子にも話したことないし、学校でエロゲの貸し借りなんて、一度もしたことないのに!!）

「不思議そうな顔をしているわね。鏡原君のプライベートを、私は実際に見ていたのよ。この半年間、遠隔透視の魔法を使って、二十四時間年中無休であなたを監視していたの。それが私に与えられた任務なのだから当然でしょう？」

感情の揺らぎを微塵も感じさせない表情と口調で、紫亜はとんでもないことを言う。

「かつ、監視が任務だッてえ!! 鳥飼さん、キミは一体何者なんだ!!」

生まれて初めて、異性の手に性器を撫でられるもどかしくも心地良い快感に勃起を委ねながら、あまりにも信じがたいクラスメイトの告白に声を上ずらせる涼太。

「うすうす感づいてはいると思うけれど、私は魔女なの……。禁断の魔法や呪物が、人々に被害をもたらす前に捕捉、封印するために人知れず活動している組織、禁呪封印局所属のエージェントよ」

「まっ、魔女お!! 鳥飼さんが魔女だッてえ!! 魔女って言うのと、あの、エロゲとかラノ

べとかアニメなんかに出てくる、アレだよね？」

捕まった当初はパニックで上ずっていた涼太の声は、落ち着きを取り戻している。

つい数分前までは、何の変哲もない男子学生だった少年は、突然、非現実の世界に放り込まれて困惑しながらも、持ち前の妄想力で異常な状況に順応し始めていた。

「ええ。エロゲやラノベだけでなく、世界中の伝承、伝説にも出てくる、あの魔女よ。：この姿では、実感が湧かないかしら？　いいわ、魔女姿になった私を特別に見せてあげる」

股間への愛撫を中断して立ち上がった紫亜の右手には、先ほど涼太を捕まえた時に持っていた短い棒が握られていた。

光沢のある白っぽい素材で作られた先細りのスティックは、木製の柄の部分も合わせる長さは三十センチ程度。

「それが、魔法の杖って奴なのかな？」

相変わらず見えない縄で簀巻きにされた状態の少年は、彼を今の状況に追い込んだ魔法を放ったアイテムを、興味津々で観察している。

「ええ、そうよ。これは導師の資格を得た魔女だけに携帯が許されるコンパクトサイズのマジックワンド……。魔法衣……。召喚ッ！」

凜とした声を上げた紫亜の右手で、マジックワンドが白い光を放ち始める。

光に包まれた魔法の杖を握った右手を高々と差し上げた鳥飼紫亜は、頭上の空間にクルリ、と大きな円を描いた。

光る軌跡が、白いリング状になって空間に刻まれ、その中心から、何かがフワリ、と落ちてくると、魔女と名乗った少女の身体を覆う。

「マント!?!」

それは、少女の肩から足首の辺りまでをカバーするマントだった。

表面の色は深いワインレッド、裏面は、まるで夜の星空のような深い群青色をしており、幾つもの光点が瞬く不思議な布地でできている。

頭上に輝く円から、次に落ちてきたのは、いかにも魔女っぽいデザインの、鏝広なところが帽子だった。布地はマントとおそろいの色使いで、鮮やかな赤の大きなリボンが飾りに付いている。

「これで信じてもらえたかしら？」

被った帽子の角度を微調整しつつ、魔女姿になったクラスメイトは、相変わらずの無表情なまま問いかけてくる。

「えっと……マントと帽子だけで、制服は変わらないんだ？」

ちよっと残念そうにつぶやく涼太の脳内では、アニメやエロゲに出てくるような、もう少し露出の派手な、いわゆる萌え系の衣装に変身する紫亜の姿が展開されている。

「そうだけれど、何か？」

「いつ、いや、べ、別に……」

黒く深く澄みきった瞳に見つめられた少年は言葉を濁す。

「それじゃあ、説明を続けるわよ……」

魔女姿になった少女は、見えない縄に縛られた涼太の横に添い寝するような体勢になると、再び勃起に指を這わせてくる。

「うっ、ンンッ……！」

心地良い感触に呻く涼太の股間で、わずかに萎えかけていた牡器官が再び力をみなぎらせ、制服の股間部分を窮屈に張り詰めさせる。

「魔法衣を着用したお陰で、強い性魔法の波動をより明確に感じ取れるわ……。クピドの矢、急激に顕在化しているわね」

制服の股間に円筒状の盛り上がりを作り形成した勃起を無表情なままスリスリと撫でさすりながら、魔女姿の美少女はつぶやく。

「ちょ、ちょっと聞いていい？ そのクピドの矢とかが顕在化したら、オレ、どうなっちゃうの？」

快感と共に込み上げてくる不安に複雑な表情を浮かべた涼太は、無表情なクラスメイトに質問する。

「そうね……。無限に等しい精力と魔力を獲得して、強力な性魔法を思いのままに使えるようになるはずよ。その力に溺れ、欲望のままに振る舞えば、鏡原君は人々に魔王と呼ばれる存在になってしまふ可能性が高いわね」

「ま……。魔王ッ!! オレが!!」

涼太の脳内に、魔王が主人公のエロゲ画像が走馬燈のように駆け抜けた。

（エロゲの魔王みたいに、好き放題にエロいことできるなら、ちよつとなつてみたい気持ちもあるけど、嫌われたり憎まれたりするの嫌だなあ。魔王退治の勇者とかが攻めてくるのも厄介そうだし……。でも、エッチはやりたくないなあ）

数秒のうちに脳内で妄想を展開させた涼太の顔に、スケベつたらしい笑みと困惑が交互に浮かぶ。

「心配しなくていいわ。鏡原君を魔王にしないために、私がいるのよ。クピドの矢が暴走する前に欲望を制御、解放して対処するのが、私の役目なのだから、鏡原君は安心して、私に身を委ねていればいいの」

スラックスの前をはち切れさせんばかりに怒張した股間に、掌をあてがってゆるゆると円を描くようにこね回しながら、学園一の美少女はエロゲと妄想が大好きな男子の目をまっすぐに見つめてくる。

「そっ、それじゃあ、半年前に鳥飼さんが転校してきたのって、オレを監視するためだっ

たつてことなの!？」

「ええ、その通りよ……」

あつさりと頷いた紫亜は、話を続ける。

「クピドの矢が顕在化する兆候を、禁呪封印局が探知したのがおよそ二年前、魔力波動を探索した結果、鏡原君、あなたがクピドの矢の保持者であることを確認したのが半年前。だから、私が監視者として送り込まれたのよ」

説明する間も、紫亜の指は涼太の股間に浮き出た勃起を撫で回し続けている。それは愛撫と呼べるほど強いものではなく、撫でられているのがかろうじて判る程度のささやかな刺激ではあったが、異性の手に初めて触れられた少年のペニスはあるからさまざまな欲情反応を見せつけ、制服の股間を狂おしいほどに張り詰めさせている。

「遠隔透視の魔法を使って、全て見せてもらったわ。エッチなゲームに興じて興奮を高め、た鏡原君がおもむろに自慰を始めるところも、絶頂へと至る所も、余すところなく、全て、ね……」

スラックスの股間に盛り上がった肉茎の輪郭に沿って掌全体を滑らせ、摩擦愛撫しながら、制服姿の魔女はとんでもないことを口にする。

「そっ、そんな……まさか鳥飼さんに、あれを全部見られていたなんて……!？」

エロゲをプレイしながらオナニーに耽っている様子を、学園一のスーパー美少女に見ら

れていたかと思うと、恥じらいのあまり気が遠くなりそうだったが、同時に異様な興奮を覚えて勃起が猛ってしまふ。

「それにしても、たいしたものね。あんなに毎晩エッチなゲームをして、複数回の自慰を行うなんて、クピドの矢の持ち主ならではの精力なのでしょうね」

「うひ……う……う……う……ッ……」

淡々とした口調で告げる紫亜は完全に無表情なので、褒めているのか、バカにされているのかよく判らない。

「安心しなさい、私が鏡原君を導き、荒ぶる性欲を解消しつつ、魔力を制御できるように修行をつけてあげるから」

「かつ、解消って……つまり？」

「クピドの矢の暴走を鎮める方法はただ一つ、物理的な手段によって性欲を解放すること。それも、自慰や妄想ではなく、第三者の肉体を駆使したご奉仕によって、ね……」

「ごっ、ご奉仕だってえ!!」

窮屈な制服の内側で、限界勃起状態のペニスがビクンッ！ と跳ね上がる。

「あ……？」

指先に勃起の律動を感じた魔女は、小さな声を上げ、股間から一旦手を離す。

それは、無表情、無感情なクール系美少女が初めて見せたほんのわずかな揺らぎのよう

な驚きの表情であつた。

「鏡原君、クピドの矢の力が暴走するのを防ぐため、これからは、一切の自慰行為は禁止よ。性欲の解消をしたい時は、私に言いなさい。いつでも、どこでも、私がお奉仕してあげるから……」

信じられない言葉と共に、勃起に再び指が触れてくる。

(鳥飼紫亜さんが……学園一のクール美女が、オレに……ごつ、ご奉仕ッ！)

ご奉仕というキーワードから検索された画像やシチュが脳内に溢れ返り、エロ妄想好きな少年の身体を妖しい歓喜に震わせた。

「だから、鏡原君、ガマンしないで、いつでも射精していいのよ」

制服越しの勃起摩擦を続けながら、恥じらいや欲情を感じさせぬ声で紫亜が言う。

「うっ、うん……でも、なんて言うか、ちよつと刺激不足と言うか……ごつ、ゴメンッ！別に鳥飼さんが下手だとか、そういうことじゃないんだ！」

「謝らなくてもいいわ。私も男性器愛撫の実践は初めてだから、経験不足は否めないもの。刺激が足りないと言うのなら、性魔法の一つを特別に見せてあげる……」

さらに身を屈めてきた少女の唇が、決して厚いとは言えぬ涼太の胸板に軽く押し当てられ、ワイシャツの内側に、フウツ、と熱い吐息を吹き込んでくる。

「ふあ、な、何を？ あああッ!!」



怪訝そうに眉を寄せた少年の身体が、鮮烈な快感に襲われる。

「『旋回する熱き吐息』の魔法よ……どう？ 感じるかしら？」

紫亜の問いに、少年は無言で頷くことしかできなかった。

（なっ、なんだこれ!! 息が……熱いのが、乳首で回ってるッ!）

シャツ越しに吹き込まれた、熱く潤んだ吐息が、涼太の乳首を包み込んでクルクルと旋回しているのだ。それはまるで、剥き出しの両乳首を柔らかな舌に舐め回されているような、妖しい快感を湧き起こらせ、小さな肉粒サイズの乳頭を硬く尖り勃たせてゆく。

乳首の快感は全身の性感を活性化させ、腰椎の奥底からむず痒い射精欲求がゾワゾワと込み上げてきた。

「んは……あふううッ!」

鼻にかかった呻きを漏らす涼太の股間で勃起がしゃくり上げ、分泌量を増したカウパー腺液が下着を染み通って滲み出し、制服の股間に小さな濡れ染みを浮き出させる。

「……男の子も……濡れるのね」

ポツリと漏らした少女のつぶやきには、わずかながら感情が含まれているように、涼太には感じられた。

（鳥飼さん、もしかして、自分の身体にもこの魔法を使ってオナニー、しているのかな？ ああ、イケナイ妄想が止まらないッ、止められないッ!）

乳首から湧き起こるむず痒い快感に陶醉した少年の脳内に浮かぶのは、たわわなバスの先端で勃起した乳首に吐息の魔法をかけて喘いでいる紫亜の痴態……。

涼太のたくましくすぎる妄想力は、艶めかしいピンクの乳首を包み込む旋風の様子や、刺激に反応してピンッ、と勃起してゆく乳頭の質感まで、驚くほどのリアルさで脳裏に描き出していた。

「……鏡原君、妙な想像してはダメよ」

涼太の思考を読み取ったかのような絶妙すぎるタイミングで声をかけてきた魔法の指使いが、わずかにハードさを増す。

シユツシユツシユツシユツシユツ……リズムカルな布擦れの音を立て、下腹と掌の間に挟み込まれて圧迫摩擦を受け続けている勃起を、狂おしい快感の電流が走り抜け、ペニスがビクビクとよがり震える。

「あ……あああ……」

眉根を寄せ、情けない声を上げた涼太の身体が強ばり、布越しの手コキ責めを受けていた勃起がひととき硬度を増して張り詰めた。

「もうすぐなのかしら？ このまま続けるわよ……射精しなさい」

限界まで強ばって浮き出た男性器のシルエットに沿って、白く滑らかな指が前後に滑り、亀頭の丸みを掌で圧迫しながらグリグリとこね回す。



勢いよく勃起してゆく男性器の変貌を目にした紫亜が、小さな声を上げる。

それは、ごく小さな、押し殺したような声であったが、そこにはわずかながら驚いたような感情の揺らぎが込められているように涼太には思えた。

（もしかして、あのクールで無表情な鳥飼さんが、オレのチンポが勃起してゆくのを見て驚いてる？　くうううッ！　恥ずかしいけど、堪らないエロシチュだよ！）

さらに充度を高めた勃起が鈍痛を感じてしまうほどに猛って垂直に振り返り、ビクッ、ビクンッと挨拶でもするかのようにしゃくり上げる。

「……今度は、触ってもいないのに勃起できるのね……」

「えっ、あ、あの……男の股間はなかなか思うようにならない厄介な器官なので……。そつ、それでですね師匠。これって、修行なんでしょうか？　そつ、それとも……ごつ、ご奉仕、なんででしょうかッ!？」

疼き昂る勃起もあらわに直立不動の姿勢を取ったまま、エッチな期待に声を弾ませてしまふ涼太。

「修行よ。……それに……ご奉仕も半分、かしらね？　これは、クピドの矢の昂りをコントロールして、魔力の暴走を防ぐ大切な修行。私の言う通りに制御できたら、ご褒美のご奉仕をしてあげるわ……」

淡々と告げる紫亜の声が、シャワーの湯音と共に少年の鼓膜を震わせた。

「昂りのコントロールって？ オレは具体的には何をすれば……」

「鏡原君は、そのまま動かないでいいの。私も準備するから、しばらく待っていなさい……」

シャワーを浴びる音を立てながら、魔女が言う。

温かな湯気と共に、シャワースープのいい匂いが、涼太の鼻孔をフワリ、とくすぐった（鳥飼さんが……シャワー浴びてる!? ってことは、まさか、今は全裸ッ!?）

妄想エンジンをフル回転させた涼太の脳裏に、紫亜のシャワーシーンが浮かぶ。

色白な極上プロポーションの裸身を舐めるように流れ落ちてゆく湯と、わずかに上向き、恍惚の表情を浮かべる美貌、湯滴を弾き返す爆乳の艶姿が、視界を封じられた少年の脳内に異様なほどのリアルさで投影されて、股間の充実度がさらに増してしまう。

乳首の色はどんなだろう？ とか、陰毛はどのくらいの濃さだろう？ とか、はしたない想像が次から次へと浮かんできて、涼太の性欲は爆発寸前だ。

（すぐ目の前で、鳥飼さんがシャワー浴びてる……。このままちよつと近づけば……）

紫亜に襲いかかって犯したいという危険な衝動に、涼太の身体が震える。

（いや、ダメだッ！ 鳥飼さんは魔女で、オレの師匠なんだから、欲望に負けて襲ったりしたら、どんなお置きさされるか判らないぞ！ ガマンッ、そんなに焦らなくても、エッチなご奉仕してもらえるんだから、今は妄想だけでガマンだ！）

込み上げる欲情と理性のせめぎ合いを続けているうちに、シャワーの音は止まり、紫亜が近づいてくる気配を感じる。

（来るッ！ まさか、直に触ってくれるの？ くうう、今、触られたら、興奮しすぎて暴発しちゃうかも……）

緊張と期待に身を強ばらせ、勃起だけをピクピクとしやくり上げながら、少年は快感に備えている。

「師匠として命じるわ。絶対に動いちゃダメよ。そのまま、私がいいと言うまで耐えなさい」

「た、耐えるって、何を？」

困惑する少年の勃起を、ほのかに温かく柔らかいものがフワリ、と包み込んだ。

「うひッ！ あ、ああ……ッ!?」

情けない声を上げ、ギクギクンッ！ と身を強ばらせた涼太のペニスは、マシユマロのように柔らかく、つきたての餅のようにしっとりとした感触に左右から挟み込まれている。

「想像していた以上に堅くて熱いわね。クピドの矢が、濃厚な魔力波動を発しているのが感じられるわ……。この行為は、確か、パイズリと言うのだったかしら？」

快感に強ばってヒクヒクと震えている涼太の胸板を、紫亜の声が甘くくすぐる。

「ばっ、パイズリいい!？」

素つ頓狂な声を上げた涼太のペニスが、柔肉の狭間でビクビクビクンッ！ と歓喜の痙攣を起すが、ポリウム満点で柔軟な乳房は、暴れる怒張をしつかりと包み込んで逃がさない。

（あの、鳥飼紫亜さんのおっぱいが……オレの、オレのチンポ挟み込んでるッ！ このフワフワで蕩けそうな感触が、学園の男子達の憧れになってる鳥飼さんの爆乳なんだッ！）  
叫び出したくなるような感動と快感に全身が包まれ、全ての感覚がペニスに集中して、何も考えられなくなる。

「この、パイズリという行為は、実際の刺激よりも視覚情報による昂りの方が強いらしいわね？ だから、視覚を封じたのよ……刺激はそれほどでもないでしょう？」

釣り上げられた魚のように暴れる勃起を乳房の谷間で押さえ込みながら、男の器官に奉仕しているとは思えぬ冷静な口調で淡々と解説する魔女。

「くひッ！ そつ、そうなんですか……？」

上ずった声を上げる涼太。

生まれて初めて体験するパイズリ奉仕、それも、学園一の爆乳美少女のバストに挟み込まれた少年の勃起は、興奮と感動で今にも暴発してしまいそうに猛り狂っている。

「鏡原君は、余計なことを考えずに、快感の制御だけに専念しなさい……エッチな妄想は一旦中止して、純粹に快感制御だけに集中するのよ」

「ビクッ、ビクンッ、と歓喜の脈動を起こしている勃起を爆乳で圧迫しつつ、魔女は感情の昂りを全く感じさせぬ声で命じる。

「はっ、ハイイイ……具体的に、どうやれば快感制御できるんでしょうか？」

わずかに腰を突き出した直立不動態勢で、涼太は高く裏返った声で質問した。

「確か、二ヶ月ぐらい前に鏡原君がやっていた、退魔仙女が出てくるゲームに、『小周天しょうしゅうてんの法』というのがあったわよね？ あの方法がそのまま使えると思うわ」

爆乳魔女は、パイズリ奉仕の体勢にあるとは思えぬ落ち着き払った声音で指示を下す。

「え？ あ、ああ、確かにそういうシーンがあるエロゲをやったな……。でっ、でも、どうしてそんなに細かいことまで知ってるの!？」

エロゲマニアの少年の顔がギクリ！ と強がる。

半年前から、紫亜が魔法を使って涼太の日常生活を監視していたことは、今朝、屋上で手コキ責めされながら説明を受けていた。しかし、まさか彼が遊んでいたゲームの内容まで事細かに知られていたとは……。

「あのゲームの主人公がやっていたのと、基本的なやり方は同じよ。クピドの矢から発する疼きを、経絡けいらくに沿って体内で循環させるの……試しにやってみなさい」

「う……うん……」

ぎこちなく頷いた少年は、まず、身体の中で、背骨に沿って円環状になった気の通り道



をイメーじし、股間で渦巻いている熱気がそこを通って循環している様子を思い浮かべる。「あ……できそうだよ……熱いのが上がってきて……回転してるのを感じる！ すつ、凄  
いよ！ オレ、仙道の技を使ってる！」

股間から熱いものが背筋をせり上がり、頭頂部を経由して、また下降していく感覚に、  
歓喜の声を上げる涼太。

「良くできたわ。流石は妄想の達人ね……そのまま続けなさい。これから、クピドの矢を  
刺激するから、鏡原君は、私がいいと言うまでガマンするのよ。それが修行。いいわね？」  
興奮する少年とは裏腹に、いたってクールなままの魔女は、パイズリ奉仕を開始した。  
むにゅっ……ふにゅっ、ふにゅるっ……にゅむっ、にゅむっ、もにゅっ……。

蜂蜜を詰め込んだ水風船のように柔軟でありながら、猛った男根を押し返すかのような  
弾力を内に秘めたボリウム満点の筋肉が、ガチガチに猛った肉茎にピッチリと密着して  
緩やかに上下する。

乳房を覆っているシャワーソープの泡が潤滑剤となっていて、パイズリの動きは滑らか  
だ。

「くっ、うあ……んはッ！ あ、ああ……じゅ、十分に、刺激……つつ、強いよッ！  
うああ、んああああ……ッ！」

視界を封じられた少年は、ペニスをふんわりと包み込んで上下に滑る筋肉がもたらす摩

擦快感に陶酔の声を上げ、膝をガクガクと震わせる。

「そう？ それじゃあ、もう少しゆつくりと動くわね……」

上下動の速度が半分ぐらいままで落ち、魔力を宿した男根を、魔女の爆乳がスローな動きで擦り鬨る。

にゅぷるるるっ……むにゆるるっ……くにゆるるっ……じゅぷるるるっ……。

柔肉に挟み込まれて摩擦されるもどかしくも心地いい感触が、勃起の深い部分にまで浸透し、細かな脈動が止まらない勃起の先端から、水飴のように濃厚な男の愛液がプチュツ、と溢れ出す。

漏れ出てきた体液は、パイズリ奉仕の動きでこね回されて、乳肉とペニスに塗り込まれた。

「鏡原君、小周天の法、続けなさい……」

たわわなバストを中央に揉み寄せ、先汁とシャワーソープの混じり合った淫猥な粘液にまみれたペニスをグチュグチュとこね回しながら、爆乳魔女は興奮の欠片も感じさせない声で指示を出す。

「くふ……ンツ、あふ……小周天……続ける……んんんっ！」

脳内に湧き起こるエロ妄想をシャットダウンした少年は、にわか覚えの仙道を駆使して、クピドの矢の魔力制御に専念する。

パイズリ快感が変じた熱気を経絡に沿って上昇させ、頭頂を経由してもう一度降ろしてゆく。

そのループしてゆく道筋を身体の中に固定し、ヨガや仙道の奥義として伝えられている経絡を妄想だけで完成させた。

「……凄いわね、もう、小周天路が形成されているわ。素晴らしいイメージ力よ、鏡原君」パイズリ奉仕している最中とは思えぬ落ち着き払った声を、浴室内に響かせながら紫亜は状態を小刻みに揺すってクピドの矢に奉仕を続ける。

（鳥飼さんって、とんでもなくエッチなことしているのに、どうしてこんなに冷静でいられるんだろう？ 魔女だから……なのかなあ？）

限界勃起状態のペニスを包み込む心地良い圧迫感に耐えながら、少年は思う。

先ほどの彼女の言動から判断すると、男性器を直接見たり愛撫したりした経験はこれまでなかったようなのだが、勃起した男性器にパイズリ奉仕することに恥じらいや嫌悪感といった感情は全く抱いていないように思える。

（もしかして、自分にも精神操作の魔法をかけているのかな？ その可能性は高いけれど、それってなんだか寂しいな……）

涼太の複雑な思いも知らぬように、勃起を擦る乳房の蠢きは続く。

「んっんっんっんっ……」

ぬちゅ、くちゅ、ちゅぶつ、にちゅにちゅにちゅ、ぶちゅるっ……。

規則正しい紫亜の呼吸音と、いきり勃った肉柱が、柔肉の塊に挟み込まれて扱き責められる音が浴室内に延々と響く。

「う……くあ！ あああ、師匠のオッパイ、気持ち良すぎて……オレ、もう、ガマンできないかも……知れませんかッ！」

パイズリ責めされている肉柱の奥からジワジワと込み上げてくる射精欲求に、ご奉仕慣れしていない少年は上ずった声を上げて身悶えてしまう。

「まだ五分も経ってないわよ。最低でも二十分はガマンしなさい……」

上半身を小刻みに揺らして勃起への刺激を続けながら、爆乳美少女は、クールな口調でガマンを命じる。

「そっ、それは……むっ、無理かも知れないですッ！ いや、絶対に無理、ですうう！  
もう……射精しちゃいそうッ！」

正直に告げた涼太の牡器官がビクビクンッ！ と切羽詰まった脈動を起こし、大量のガマン汁が吹き出て乳房の谷間を汚す。

「……仕方がないわね……インビジブルバインドッ！」

紫亜の声が浴室内に響くと同時に、限界まで追い詰められて強ばったペニスの根本が、ジワリ、と締め付けられるような感触が湧き起こる。



シャワーソープの泡と先走りの混合液にぬめった柔らかな乳房が、緊縛を逃れた剥き出しの亀頭部分を集中的に擦り磨る。

淫熱に猛って張り詰めた亀頭冠が柔軟にうねり蠢く乳房に包み込まれ、ヌリユヌリユと擦り磨られるたびに、甘く痺れるような快感電流が腰椎の奥を駆け抜け、射精中枢に狂おしい放出欲求が溜め込まれてゆく。

「ンツ……ンツ……ンツ……んふ……ンツ……んっんっ……くふ……ンツ……」

パイズリ奉仕の上下動にリズムを合わせて、規則正しい紫亜の息づかいが涼太の腹部をくすぐり、浴室内に艶めかしく反響する。

（鳥飼さんに、オレのチンポの匂い嗅がせちゃってる……申し訳ないけど……でも、興奮しちゃうよっ！）

つい数分前に入浴したばかりとは言え、青春まつただ中のペニスは男の性臭をムンムンと立ち上がらせ、紫亜も確実にその野性的な臭気を嗅いでいるはずなのだが、彼女の動きや呼吸には一瞬の躊躇や停滞も感じられない。

しかし、勃起を包み込む淫熱が伝わったのか、ペニスを包み込む乳房も火照りを増し、彼女が漏らす吐息にも、心なしか甘い響きが混じり始めているように、涼太には思えた。

（鳥飼さん……快感も魔法で封じているのかな？ ちよつと試してみたい……オレだけ気持ち良くなるんじゃないかって、鳥飼さんにも感じて欲しい！）



紫亜の足元に到達すると、垂直上昇に転じてスカート内部に侵入した。

(よしっ！ 第一段階成功ッ！ 第一の魔法、発動ッ！)

絵筆にかけられていた遠隔透視の魔法が発動し、涼太の視界にスカートの内部が映し出される。

(おお！ 鳥飼さんの太腿とパンツがバッチリ見える、見えるぞお！ テレビ番組のワイプ画面みたいに、視界の片隅に子画面が出てる感じ？ 鳥飼さんが言ってた通りだ。なるほど、こいつは便利な魔法だぞ！)

視界の片隅に浮かび上がった映像は、白く滑らかな美少女の生足を真下から見上げたようなベストポジションで、秘めやかな部分を包む下着のレース模様までクッキリと見える超高解像度だ。

その魔法は、紫亜が半年の間、涼太の一挙一動、エロゲをやりながらオナニーする様子まで監視していた遠隔透視の魔法を、彼なりにアレンジして応用したものであった。

(鳥飼さんはまだ気付いていないな……子画面をもっと拡大……ええい！ 面倒だから右目の視界全部、筆からの中継映像にしちゃえ！)

左目を閉じて余計な風景をシャットアウトした涼太は、右目の視界に拡がる絶景を堪能しつつ、絵筆を操ってイタズラを仕掛ける。

太腿の辺りまでフワリと浮かび上がった絵筆の毛先が、滑らかな内腿をツツツ、と撫



でくすぐった。

「……!?!」

声も出さず、ピクンッ! と敏感な反応を見せた紫亜は、スカートの中に虫でも侵入したと思ったのか、恐る恐る内腿を探るが、涼太は巧みに絵筆を操って指先の探求から逃れ、今度は下着に包まれた尻の谷間辺りをコチョコチョコとくすぐり責める。

「ひゃう……ンッ!?!」

小さな嬌声を上げた少女の身体がクンッ! と伸び上がり、周囲に居た数人の生徒達が声を聞きつけて紫亜の方に視線を向ける。

「……失礼、ちよっとくしゃみが出てしまったわ……」

クールな口調で言い訳した紫亜は、無表情を装ってキャンバスに向き直るが、耳は紅潮し、下半身は過剰に緊張して強ばっていた。

(まだオレのイタズラだつて気付いてないみたいだな……フフッ、ここからが本番、どこまでクールな無表情を保てるかな?)

涼太のイタズラはさらに過激になってゆく。

(照準セット! ヴェーゼブレスの魔法、発動ッ!)

シュパンッ!

筆の軸にまとわせていた、愛撫の吐息が尻の谷間に向かって発射され、下着の布地を透

過して、最も恥ずかしい蕾に命中した。

「はあう！ ふわうううンッ！」

最大の急所であるアヌスを、熱い吐息の魔法に責められたマゾ性癖の魔女は、慌てて口を押さえ、漏れそうになったはしたない声を必死に押し殺しながら、涼太を睨み付けてくる。

（あ、気付かれちゃった？ でも、もう遅いよ。そおら、筆責めも開始だあ！）  
しゅっ、しゅっ、しゅっ、しゅるっ……。

精密に操られた筆の毛先が、股布越しに紫亜の秘裂をなぞって責め立てる。

絵筆の先端には、涼太が独自に編み出した振動の魔法がかけられていて、普通の筆責めとは比べものにならない刺激を敏感なワレメに送り込んだ。

「んきゅふううううンッ！」

美脚を内股気味にすぼめて前屈みになった紫亜は、口元を押さえた掌の下からくぐもつた呻きを漏らしつつ、いつの間にか握っていたマジックワンドを自分に向けて、魔法を發動させた。

「くうむ……ンンッ、ドッペルゲンガー……ッ！ ステルスッ！」

快感に震えながら魔女が発動させたのは、分身映像を作り出す魔法であった。

紫亜の身体が二重写しのように見えた次の瞬間、黙々と筆を動かし続けている少女の姿

をキャンパスの前に残し、ステルスの魔法で周囲の視線を遮った紫亜の本体が地面にペタリとへたり込む。

(なるほど、その手があったか！ 流石は師匠だな)

感心している涼太に、紫亜が無言のままマジックワンドを向ける。

「インビジブルバインドッ！」

「ぐほおうううッ！」

今度は、涼太が股間を押さえて苦悶の声を上げてしまう。

少年の股間に見えない縄が巻き付いて、キリキリと締め付けていた。

「おい、鏡原、どうした？ 腹痛か？」

近くにいた男子生徒がニヤニヤ笑いながら声をかけてきた。

「うぐ……んむ……そうらしい……トイレ行ってくるよ……あぐぐぐぐぐぐ」

前屈みになった少年は、たどたどしい歩き方で紫亜の前を横切り、一番近いトイレへと向かう。

「鏡原君……少しは反省した？」

分身を残し、トイレまでついてきた紫亜が声をかけてきた。

ステルスの魔法を使った彼女の姿は、涼太以外には見えていない。

「いきなり魔法を使ったイタズラを仕掛けてくるなんて……クラスのみんなにバレたらど

うするつもりなの!!」

股間の痛みで涼太の精神集中が乱れたせいで、紫亜を責めていたイタズラな魔法は中断したようだが、彼女の頬は快感の余韻に紅潮し、瞳は怒りとマゾ性感の入り混じった淫靡な光を放っている。

「しっ、師匠、ごめんなさいッ、真面目に絵を描いてる鳥飼さん見てたら、ついムラムラしちゃって……でも、色んな魔法を思いついたから、一秒でも早く試してみたかったんだよ!」

額に脂汗を浮かばせながら必死に言い訳する少年の股間を縛っていた見えない縄が、フッ、と消滅する。

「はああ、苦しかったあ……でも、ちよつと気持ち良かったかも……」

「苦痛から解放されたことを喜ぶかのように、少年のペニスはグングンと体積を増してゆく。

クピドの矢は、極めて打たれ強いのであった。

「あんなに近くにいた鏡原君の魔法発動に気付かないなんて、私にも油断があったわね……。それとも、それもクピドの矢の力、なのかしら?」

やや自嘲気味に言った魔女は、軽く首をかしげながら問いかける。

「それを確かめるためと、さつきイタズラしちゃったお詫びに、ここでエッチしない?」

「え？ トイレで？ それに、エッチなイタズラのお詫びがエッチだなんて、矛盾しているのではないかしら？」

調子のいい申し出に眉をひそめて言いながらも、状況を確認するように周囲を見回してしまふ紫亜。

「そう、個室内なら誰かに覗かれる心配もないし……ほら、小道具も用意してあるよ」  
涼太の手には、数本の絵筆が握られていた。

「それを……魔法で操ったのね!!」  
自分の股間を襲った快感の正体を知った紫亜の頬がさらに紅潮し、メリハリの利いた肢体がブルツ、と震える。

「筆責め、結構気持ち良かったでしょ？ ちょっと工夫すれば、もっと複雑なコントロールもできるはずなんだ、だから、師匠の身体で試させてよ!」

先にトイレの個室に入った涼太は、マゾ魔女を手招きする。

「相変わらず強引なのね……いいわ、少しでもだけ付き合っただけ……」

結局、淫らな誘いを断れぬ紫亜であった。

「鳥飼さんの感じてる姿を想像しただけで、オレのチンポ、こんなになっちゃったよ！  
ほら、来て！」

ギンギンにそそり勃って金色の燐光を放つクピドの矢を剥き出しにして便座に腰掛けた

少年は、待ちきれない様子で誘う。

「そんなに焦らないで……下だけ脱ぐから……待って……」

意地悪な魔法の余韻で欲情してしまっている様子の紫亜は、下着をぎこちなく脱ぎ捨て、後背位の姿勢で、輝く勃起の上にゆっくりと腰を下ろしてゆく。

ぬぷ……くちゆるっ……。

既に潤んでいた膣口に、張り詰めた亀頭が啜え込まれる。

「んは……もう濡れているんだね？」

「こっ、これも、鏡原君のエッチなイタズラのせいよ……」

魔法は文句を言いながらも、一気に尻を落として怒張を呑み込んだ。

「はああうううんッ！」

「くほおお！ やっぱり気持ちいいッ！」

繋がりが合った少女と少年は、ほぼ同時に快感の声をトイレ内に響かせる。

「ねえ、鳥飼さん、オレの魔法、凄く上達したでしょう？」

挿入快感に震える少女の耳元に囁きかけながら、涼太は紫亜が着ている制服の上着を脱がしてゆく。

「えっ、ええ……信じられないぐらい、んは……あふうう……上達しているわ。あんな複合操作魔法まで使えるなんて……あうう、凄く強い魔力波動が……伝わってくるわ」

師匠役の魔女は、感嘆の声を上げ、膾壁をピリピリと帯電させる魔力波動の感触に美貌を仰け反らせる。

「鳥飼さんの中がプルプル震えているのがチンポに伝わってきてるよ。気持ちいいんだね？ もっと気持ちいいことしてあげるよ」

制服のシャツを脱がせた涼太は、ブラもずらして乳房を剥き出しにする。

ブルンッ！ と弾力たつぷりに揺れ弾んだ爆乳の先端では、淡いピンク色の乳頭が既に勃起し始めていた。

「もっと、気持ちいいこと？」

マゾ性感に目覚めた魔女の裸身が、妖しい期待にわななく。

「さっきの筆責め、なかなか良かったでしょ？ もう一回味わってみたくない？」

「う……うう……」

恥ずかしげに目を伏せながらも、はつきりと頷いてしまう紫亜。

「今度は何本同時に操れるのか、実験してみるよ」

剥き出しになった少女の肩口や首筋をチュッ、チュッ、と吸いついばみ、いい匂いのする柔肌にネットリと舌を這わせながら言った涼太の手には、絵筆の束が握られている。

「えっ？ そんなに……!？」

「うん。行くよ、まずは乳首から！」

フワリ、と宙に浮いた二本の絵筆が、左右の乳首に接近し、卑猥な円運動を開始する。さわつ、さわつ、さわつ、しゆるしゆるしゆるつ……。

ふつくらと盛り上がった乳輪と、その中心でピンツ、と勃起した乳頭の周囲を、微細に振動する柔らかな毛先が撫でくすぐって責め立てた。

「ひゃあううんっ！ きゅふううんっ、んっ、んんんっ、くうううんツッ！」

堪らなくくすぐったくて、ゾクゾクするほど気持ちいい搔痒快感に襲われた魔女は、全身をギクギクンツッ！ と緊張させて色っぽい鼻息を漏らす。

喜悅の震えに連動してプルプルと柔らかく震える爆乳の先端で、艶めかしいピンク色に照り輝きながら勃起を際立たせた乳頭を、エロ魔法に操られた筆が執拗にくすぐり嬲った。「くうっ！ オマ○コが凄く締まるよッ！ 乳首を筆でくすぐられるのが気持ちいいんだね。今度は……フフツツ、ねえ、両腕上げて、万歳してみせてよ」

「えっ、万歳って……!? ま、まさか……？」

「いいから、ほら、腕上げて！」

強引に腕を上げさせた涼太は、しっとり汗ばんだ滑らかな脇の下にも絵筆を差し向ける。

つつつつ……つううううツ、しゆるしゆるしゆるつ……。

腋下の窪みを舐めるように這った筆先が上下に蠢いて敏感な部分を刷きくすぐる。





「きやふううんっ！ やっ、あああんっ！ ダメえええ！ そこは、くっ、くすぐったいのおお！ あああんっ！」

「ちよつと緊縛しちやおうかなあ……インピジブルバインドッ！」

強烈すぎるくすぐったさに身をすくめ、腋を締めて抗おうとする紫亜の腕に、涼太が放った見えない縄が絡みつき、両手を頭上に掲げた状態を強要する。

「逃げちやダメだよ。ほら、脇の下くすぐられるのも気持ちいいでしょ？ 身体中がブルブル震えて、オマ○コも凄くいやらしい反応してるじゃないか。トロトロになった肉壁にチンポがニルニルこね回されて、凄く気持ちいいよ」

「やはあああんっ、そんなこと言ったら、私も余計に意識して……あああんっ！」  
くちゆるるっ、じゅぷっ、ぷちゆるるっ！

勃起を啜え込んだ秘裂が、卑猥な指摘を受けたせいで妖しくうねり、白濁した愛液を大量に噴き出させてしまう。

「ああ、女の子の中って、こんなによく動く物なんだね。それとも、鳥飼さんのマゾな身体が特別製なのかな？」

「ちっ、違いわッ、これは、筆の……筆のせいよっ！ あああんっ！ やはあああんっ！」  
上半身を屈曲させ、左右に振って悶え抜く紫亜であったが、左右の乳首と脇の下をくすぐり騷る筆は身体の動きに巧みに追従して、一時も休まず動き続けている。

「フフフツ、逃がさないよ。鳥飼さんの身体中、オレの魔法でマゾ改造してあげちゃうんだからね！」

亀頭を舐めるように蠢く腔粘膜の快感に酔いしれながらも、涼太は魔力のコントロールを乱すことなく絵筆を操り続けていた。

「さあて、残り一本、行くよっ！」

たつぷりと魔力を練り込んだ絵筆が、筆責めに身悶える少女の目の前に浮遊してくる。

「かつ、鏡原君ツ、もう、もうダメえ、一体、どこを責める気なの!？」

獲物を狙う毒蛇のように、目の前で揺れている絵筆を見つめながら、マゾ魔女は期待と不安の入り混じった声を上げる。

「さあて、どこでしょうねえ？」

スツ、と近づいてきた筆先は、喘ぐ唇を刷くように撫で、形のいい顎のラインから喉元をなぞり、爆乳の谷間を濡らした汗を拭き取りながら下降してゆく。

「あ……ああああ……ああああん……ッ！」

筆が向かっている場所を、うすうすは察している紫亜の声が悩ましげに裏返り、マゾ快感に茹で上げられた半裸身が、クンツ！と仰け反る。

（鳥飼さん、凄く期待しちゃうてるみたいだな。身体は緊張しきってるけど、身体の奥底は期待に震えてる……）

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作フリーム系作品は、完全の方向転換でござります。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!